

高等小学校
男 四十四人 女 二十六人 計 七十人
合計 男 百七十三人 女 百四十一人 計 三百十四人

学齡児童中盲啞者調(大正六年度調査)
盲者 男一人 聾啞者 男三人 計 四人

公學費(圓單位)

科長 俸給	大正五年度 四二〇	大正六年度 四二〇	大正七年度
校長 俸給	一〇二〇	九四〇	
訓導 俸給	四七七	三〇〇	
代用教員俸給	一〇二	一〇二	
学校医手当	六三	九四	
旅費	七二		
雑給	三六		
生徒給費	三六	三四	
借地借家費	三五	四〇七	
圖書機械費	一五	一五六	
器具費	一〇	一〇〇	
消耗品費	三〇	一〇〇	
修繕費	二五	二〇〇	
其他の費用	一一	一七九	
実業補習学校費	二九	三一四	
計	二九四	三九五	

第八章 社寺

一、神社

村社 木葉神社
祭神 木葉神
村社 木葉神社
祭神 木葉神
一切焼し。然るに木葉の尊は古くより、その祭式も甚だ古雅に
り。云う。然るに木葉の尊は古くより、その祭式も甚だ古雅に
ざる。か。更に考へて遠近の尊崇から、その祭式も甚だ古雅に
産の守護神として遠近の尊崇から、その祭式も甚だ古雅に

て毎年十二月一日(古は旧十二月初卯の日)男子七人と十四歳の女子七人と式典に列し、莫産と枕と乳とを神前に供え代わる代わる是を奉持して出産の真似事をなす行事あり、且つ境内、社に八幡神社あるより、推考するときは祭神は神功皇后とあるを妥当とすべきに似たり。

当社に古來神殿の設け無し、一段高き神地に樹木生い茂れるのみ。木葉神社の名は是より起れるものか。

一説にねんこ様は字宮ノ本鎮座の八幡神社を稱したるものにて前記の祭式も同社にて行い來れるものなりしが何時の頃よりか当社にて是を行ふに至りしものなりと云う。

無格社 事代主神社 大字下田原鎮座 祭神 蛭子神
無格社 弁財天神社 大字下田原鎮座 祭神 市杵島姫神
右二社は明治四十四年三月四日、木の葉神社境内八幡神社合祀の許可を受け、全年四月十六日合祀を決定せり。

村社 宇佐八幡神社 大字上田原字宮ノ本 鎮座
無格社 宇佐八幡神社 大字天皇(由緒、來歴不詳)
祭神 大神天皇 祭神 大神天皇
右は明治四十四年三月四日、村社宇佐八幡神社へ合祀の許可を受け全年四月十八日決行せり。

二、寺院

慈福山 檀那寺 大字下田原に在り 禅宗臨濟派
元は若山禅林寺末なりしが今は妙心寺末に属す。
当寺は「紀伊読風土記」には久月山檀那寺とあり、旧記備はらざる故に其の詳らかなるを知る能はずと雖も或人の手記に大字下田原宇津荷郷に慈福山松持寺という寺ありと云うより察すれば、之は二個寺なりしものが何時の時代にか合併して今の山号となりたるものならんか。寺記には開山萬峰祖(和尙)開山の年号明らかならざれども寺記に元禄十年三月二十七日没とあり、其の後定まれる住職なく聖堂文器(寛政十二年九月二十五日寂)を以て中興開山となすとあり、其の他凡て詳らかならず。然るに本村役場保存の旧記中に中興開山聖堂文器の示寂寛政十二年に先立つ三十六年に恵兆首座招聘の文書あり、参考の為に左に掲記す。

明和二年酉十月
乍恐奉願上住持の事
一、当村檀那寺久敷無住に付此度日州高鍋大龍寺物源和尚の弟子
恵兆首座檀那寺に請待度仕奉存候間右之通御許容被為遊可被下
様に偏に奉願上候
下田原浦庄屋 肝煎
村中

霜月
御本寺へ上る

乍恐願書
一、口熊野古座組下田原浦檀那寺無住に付後住届申す出家恵兆首
座生国は日向児嶋郡高月村剃髮の師は同国高鍋大龍寺物源和尚
の弟子禅宗にて御座候。尤も僧請には中湊村正法寺祖眷首座相
立被申候本寺若山禅林寺へも相断候処愷成る出家にて切支丹類
にも無御座候間入院為致候様にとの儀に御座候
右の出家後住に請待仕度且中一同に奉願候以上
明和三年戊正月 下田原浦且中惣代 左太郎
同所 庄屋 太平次
同所 肝煎 十五郎
全断 平三郎

巽 羽左右衛門殿

(巽は古座組大庄屋なり)

拈華山 正法寺
大字上田原池の地に在り 禅宗臨濟派
元は下太田村大泰寺末寺なりしが今は妙心寺に属せり
当寺の創立年月は不詳なれども正徳以前には下太田村大泰寺宝
山宗勝和尚を勧請して開基せり(堂師は正徳元年四月十六日寂)
爾来今日に及べり。
上田原に秀田庵と称する小堂(三間に二一間半)あり、禅宗臨濟宗
にして大泰寺末なるも久しく廃寺となり居りし故明治六年一月正
法寺へ併合せり。

圓通山 普濟寺
大字佐部字長瀬にあり禅宗臨濟宗
元は下太田村大泰寺末寺なりしが今は妙心寺派に属せり。当寺
の過去帳に弘長三年十一月十二日(地中太郎市先祖)の忌辰あり。
当寺は元和年中心月傳光記室庵主の開基にして其の後寶曆初年月
桂祖潭(佐部出身)中興として本堂を再興して爾来今日に及べり。
記録整らざるを以てその他の記録詳らかならず。

第九章 交通

一、縣道

村内下田原は縣道旧大辺路線(今は熊野街道と公称す)に当り
往時より官道にして下里村浦神より当村に入り山中下田原を経
海岸に沿うて古座町津荷に達す。
旧幕の頃植えられる一里塚は村端城郭にありたり(今は松樹
伐採されたり) 明治三十一年車道開通せり。

二、里道

一、村内に数条の里道在り。
一、下田原より出合に至り西折して佐部を経て大畑峠より高池
町大字楠に達するもの
一、佐部より地蔵峠を越えて高池町大字池ノ山に達するもの
一、出合より北折して上田原に至り八郎峠を越えて下太田村中
里に達するもの
一、上田原より小匠に達するもの
一、上田原より浦神に達するもの
一、山中より縣道に分岐して佐部に達するもの 俗に鶯越えと
云う
右の中出合より佐部間は明治三十三年車道に改修し、出合より
上田原間は明治四十一年何れも車道に改修せり。
下田原 上田原 間距離 二十三町五十四間
上田原 下田原 間距離 二十六町三十四間
佐部 下田原 間距離 三十三町四十二間